

静嘉堂文庫本『源氏露』小考

——唐人の贈り物——

はじめに

静嘉堂文庫所藏『源氏露』(外題「源氏物語歌註」)は、伝藤原定家作「光源氏卷名歌」を注釈する形をとる。その叙述は、連歌師たちによって、『源氏物語』の別伝の世界として語り継がれていたものと考えられる。こうした中世「源氏物語の世界」を反映した叙述の中で、光源氏と「唐人」との関わりから生じているものに興味深い叙述が多い。

本稿では、『源氏露』に記された叙述から知ることができたことを、今までに知られている秘説と結びつけることによって、中世「源氏物語の世界」の一面を明らかにしていきたい。その中でも、「唐人の贈り物」にまつわる世界に、焦点を絞って見ていくことと

する。

中葉芳子

一 「唐人の贈り物」とは

『源氏露』では、「唐人の贈り物」に関して次のように記される。
(前略) かやうにから人おし奉る。御門も君もよろこひ給ひて、
国々より参る御たから物共から人に給り、唐人より源氏へまい
らするもの、かゝみ・あふき・たき物・かは衣・弓、是ら末に
は代々のてうほうとなるとかや。
(雲隠卷)

唐人から光源氏へ贈ったのは、代々の重宝となるような鏡・扇・薫物・皮衣・弓だった。この「唐人の贈り物」は、桐壺巻で、光源氏が高麗の相人と会った時の物語本文⁴⁾。

そのころ、高麗人の参れるなかに、かしこき相人ありけるをきこしめして、宮の内に召さむことは、宇多の帝の御誠あれば、いみじう忍びて、この御子を鴻臚館につかはしたり。(中略) 文など作りかはして、今日明日帰りに去りなむとするに、かくありがたき人に対面したるよろこび、かへりては悲しかるべき心ばへを、おもしろく作りたるに、御子もいとあはれなる句を作りたまへるを、限りなうめでたてまつりて、いみじき贈り物どもを捧げたてまつる。朝廷よりも多くの物賜はず。

から来ていると考えられる。しかし、これでは、誰に「いみじき贈り物どもを捧げ」たのか明確ではないし、その具体的な贈り物も不明である。もっとも、「いみじき贈り物」が何であったかには、中世の源氏研究者も興味を抱いたと見え、『弄花抄』で、
いみじきをくり物とも

梅か枝巻に此物の沙汰有

(桐壺巻 78)

と注釈するのを始めとして、以後の古注釈書でも同じように注釈されている。ここで、梅枝巻に「此物の沙汰」があるとするのは、物語本文に、

正月の晦日なれば、公私のどやかなるころはひに、たきもの合はせたまふ。大式のためまつれる香ども御覧するに、なほにしへのには劣りてやあらむとおぼして、二条の院の御倉あけさ

せたまひて、唐のものども取りわたさせたまひて、御覧じくらぶるに、「錦、綾なども、なほ古きものこそなつかしうこまやかにありけれ」とて、近き御しつらひのもの履、敷物、茵などの端どもに、故院の御世のはじめつつかた、高麗人のためまつれりける綾、緋金錦なども、今の世のものに似ず、なほさまさま御覧じあてつつせさせたまひて、このたびの綾、羅などは、人々に賜はず。香どもは、昔今の、取り並べさせたまひて、御方々にくばりたてまつらせたまふ。

とあることを指す。この梅枝巻の本文を考え合わせれば、桐壺巻にいう「いみじき贈り物」が光源氏に捧げられたことが推定できる。また、「いみじき贈り物」の中に、少なくとも香・綾・緋金錦が含まれていたこともわかる。だが、「いみじき」と形容される「贈り物」なのだから、もっと価値のあるすばらしいものがあつたに違いない、という考えから出てきたのが、『源氏露』での「唐人の贈り物」の具体的な提示であつたと考えられる。なお、物語本文では「高麗人」であつて「唐人」ではないが、『源氏小鏡』は「唐人」とするので、『源氏露』は、こうした別伝の物語世界を反映しているのだろう。

『源氏露』と同じように「唐人の贈り物」を具体的に提示しているのは、異本系統の『源氏小鏡』(以下、異本小鏡、と略す)であ

る。

此から人は、によりん観音のけしむにておはしましけるとかや。源氏をそうし奉りてより、我朝へ越給ふ事、兩度也。初越給ふ時、扇・鏡を奉り給ふ。そののちかのから人、若君を見たてまつらむために越給ふ。其時は、大國のたからもの数々奉る。中にもきこゆるたからには、かわ衣・たき物なり。(桐壺巻)

このように、異本小鏡では、唐人は光源氏に会うために、二度来日している。最初は扇と鏡を、二度目は皮衣や薫物などを、献上している。

以下、『源氏露』と異本小鏡に共通する、皮衣・薫物・扇・鏡を、中世「源氏物語の世界」における「唐人の贈り物」として、どういった背景を持った物なのかを見ていくことにする。

二 秘説の背景

(一) 皮衣

皮衣は、末摘花巻で常陸宮の姫君が着ていた黒貂の皮衣を指す。

物語本文では、

着たまへるものどもをさへ言ひたつるも、もの言ひさがなきやうなれど、昔物語にも、人の御装束をこそまつ言ひたためれ。聴

し色のわりなう上白みたる一襲、なごりなう黒き桂重ねて、表着には黒貂の皮衣、いときよらにかうばしきを着たまへり。古代のゆゑづきたる御装束なれど、なほ若やかなる女の御よそひには、似げなうおどろおどろしきこと、いとめてはやされたり。としか記されていない。しかし、中世「源氏物語の世界」では、この皮衣を「唐人の贈り物」とする。そして、不思議な力を持つものであることを述べる。

又かわ衣といふは、形悪き人のきればうつくしく見ゆるなり。此かわ衣を、源氏をさなくおはせし時、常陸守、御門に申てとりて持給しを、後に娘の末摘花にゆつり給ふ。

(異本小鏡 桐壺巻)

一 すゑつむ花のき給へるかわきぬは、とらのかわをひけ・あし・をにいたるまでぬいたるを、十二まひぬいたるきぬを、ひたちの宮の御形見なれば、ふたんき給へるなり。これをふるきぬかわころもといふ。

(源氏物語一部之抜書并伊勢物語) 14)

一 ふりきのかは衣とは 貂衣の事、唐人の衣。

(静嘉堂文庫蔵「水原」一四三頁)

これらの秘説から、皮衣は、唐人の衣であること、常陸宮が帝から預かり、後に形見として末摘花に与えたこと、容貌の悪い人が着れ

ば美しく見えるという効力があること、常陸宮の形見なので、末摘花はふだん着ていたこと、がわかる。これらは既に紹介され、知られていることである。¹⁾『源氏露』は、これらの秘説の背景にある世界について、より詳しい情報を与えてくれる。

まず、唐人から献上されて末摘花の手に渡るまでの過程について、『源氏露』は、

寛平の御時、から人こゑて御門にかはきぬを奉りける。此絹はたいこくのたからなり。御門めされたまふへし。あへておろかにおはしめされましきと申奉る。□桐つはの御門にゆつりたまふを、ひたちの宮、ほうさうをあつかり給ふ人也。此かは絹はほうわうのおしませ給ふ衣なり、とて桐つほの御門に申てひたちの宮給るを、後末摘花にまいらせ給ふ也。(末摘花巻)定家のせつには、かのかわ絹はから人、源氏をやしない奉りて、あまりにいとおしみの色を見せんとて、大國のたからを源氏にひさう候へとてまいらせたるを、源氏はいまたおさなふましませは、ひたちの宮、御門に申てしはらくあつかり給ふと云。

(末摘花巻)

と記す。大國の宝である皮衣を、唐人が光源氏に献上したが、光源氏が幼いということを口実にして、常陸宮がしばらく預かることになった。しかし、常陸宮は娘の末摘花に与えてしまい返さなかった。

ここで、唐人が帝に献上したとすることがあるのは、光源氏が幼いうちは、その財産管理を帝(桐壺帝であろう)がしていた、と考えたからだろうか。常陸宮が宝蔵を預かる人であった、とするのも興味深い。

皮衣の効力としては、

此衣をき給ふ時は、かたちも俄にいつくしくなり給ふ也。

(末摘花巻)

かの末摘花は、源氏に姿をよく見えんとて彼かは絹をき給ふ。と記す。皮衣には、容貌が美しくなるという効力があり、末摘花は光源氏に美しく見られようとして着ていた。『源氏物語一部之抜書并伊勢物語』にあるように、父常陸宮の形見だから、というだけではなく、容貌が美しくなるという効力を意識して着ていたのだ、と述べるのである。

このように、『源氏露』では、秘説の背景にある世界を、今まで知られていたよりも詳しく叙述しているが、それだけではない。唐人から光源氏に献上された、皮衣という大國の宝が、常陸宮を経て末摘花の手に渡った後のことも記す。

此かは衣ゆへにこそ、源氏にも蓬生の露を分させ給ふ也。

(末摘花巻)

彼かわ絹を取たまわんとて末つむ花のかたへ心をよせて、のちまでも六条院へうつし置給ふ。とかくの給ふともひたちの宮のゆひこんなれば、源氏には源氏にはまいらせたまはさりけり。雲かくれの時、源氏にとり出して見せ奉り給ふとするせり。

(末摘花巻)

光源氏が末摘花に懸想したのは、皮衣を取り戻そうとしたからで、六条院(実際は、二条東院)へ引き取つたのもそのためである。しかし、末摘花は、常陸宮の遺言であるからと、光源氏が何と言つても皮衣を返さず、雲隠の時に取り出して見せただけだった。物語本文では、光源氏は、末摘花の噂を聞いて興味を持ち懸想した、と描く。それに対して、中世「源氏物語の世界」では、皮衣という宝を取り戻すために近づいた、という。別伝の世界では、光源氏が末摘花に近づいたのは、欲得ずくの計算された行動だった、ということになるのだ。

(二) 薫物

薫物は、異本小鏡の該当部分の前半で、

かのたき物はふつせつに出たるなり。大はんにや経を、けむしやうさんさう越給し時、彼経のらんしやの為に越されしを、龍

王所望して、龍宮に龍女のいきやうのためにひさうし給ふといへり。むかし、常陸国筑波山にて佛、仏法をときたまひしに、御法ちやうもんのためにしつかつら龍王、青海原の浪を天にひる返して、佛のおはしますれいせきちかくまいり給ふ。其時、波山のこたく立ければ、浪筑山ともいへり。くわしくは古今にあり。仏の八香、れいせきにとまりていまにたえずといふ。此経はけこむ経と見えたり。かの石をはたきもの石ともいへり。かの石の上に、むかし草花生たり。これを石竹と云。これに住ける鳥あり。たきものゝ香する鳥なり。万葉には、大国のおはうちにたき物鳥来りて撫子に遊ぶともいへり。

(桐壺巻)

と述べる。ここでは、「ふつせつに出たる」として詳しく本説を述べているが、『源氏物語』と関連するのは後半である。後半部分を見てみよう。

此たき物合やうを、から人源氏にくわしくをしへ奉る。後に源氏、むらさきの上にしへ給ふ。されは、このたきものを源氏、須磨へ流され給ひし時、御かわ水にうつみ給ふ。きらく有へきならば、三年のうちにならず此たきものより煙たつへし、とてうつみ給ふ。其後けふりたちぬ。紫の上より、すまへこのよしおほせける。このたき物、これひとつのたからなり。

(桐壺巻)

唐人から薫物の調合法を教わった光源氏は、紫の上へ伝える。光源氏が、須磨下向の時、「帰京できるのなら、三年以内に煙が立つ」と言つて、この薫物を御溝水に埋めた。その後、煙が立ったのを見た紫の上は、須磨へ告げる。

薫物と御溝水が関連している物語本文は、

かのわが御二種のは、今ぞ取う出させたまふ。右近の陣の御溝水のはとりになすらへて、西の渡殿の下より出づる汀近う埋ませたまへるを、惟光の宰相の子の兵衛の尉、掘りて参れり。宰相の中將、取りて伝へ参らせたまふ。

(梅枝巻)

である。光源氏が、調査した薫物を御溝水のはとりになすらえて、遺水のはとりに埋めておいた、とは書かれているが、梅枝巻の出来事であり、異本小鏡にあるような、光源氏の須磨下向との関わりは当然ない。須磨巻の物語本文にも、薫物と須磨下向との関わりは見られない。

しかし、異本小鏡と似たような秘説は、他書にも見い出せる。

一 たき物をうつむ事、源氏すまへくたり給ふとき、さくら花をむらさきのかいにいれてうつみ給ひて、われ二度宮へかへるへくは、次の年までくつへからず、とて三月十五日、しやうねいてんの御川水のはとりにうつみ給ふ。によさんのみやにゆめのつけありて、つきの年の三月十三日におこ

し給ひて、御使はとうのちうしやうして、彼たき物にあふき一ほんそへて、すまへをくり給ふ。ゆめに見え給ひしらうおうは、石山くわんおんなり。

(『源氏物語一部之抜書并伊勢物語』50)

此巻二薫合テ方々へ送給。(中略) 須磨へ下給時、紫貝二入、

常美殿ノ御香川二埋玉ヲ取出シ、紫上ニ送給。

(『塵荊抄』梅枝巻)

須磨下向の時、光源氏が「再び京へ帰ることができるよう」と、薫物を紫の貝に入れて常寧殿の御溝水のはとりに埋めた。次の年、女三の宮(元齋院である桐壺院の皇女であろう)に石山の観音から夢のお告げがあつて、薫物を掘り出し、頭中將を使いとして、薫物に扇を一本添えて須磨へ送った。この『源氏物語一部之抜書并伊勢物語』の秘説は、物語本文の須磨巻に、

いとつれづれなるに、大殿の三位の中將は、今は宰相になりて、人柄のいとよければ、時世のおぼえ重くてもものしたまへど、世の中あはれにあちきなく、もののをりことに恋しくおぼえたまへば、ことの聞こえありて罪にあたるともいかがはせむとおぼしなして、にはかにまうでたまふ。(中略) さるべき都の土産など、由あるさまにてあり。

と、頭中將が光源氏を須磨に訪ねたことも関連していそうである。

それに対して、『塵荆抄』では、須磨下向の時、光源氏が、紫貝に入れて常美殿の御溝水に埋めてあつた薫物を、取り出して紫の上へ送つた、という。

薫物に関する秘説は、現在までに知られているものが断片的であるため、背景にある世界を明らかにしたり、関連する秘説を探し出していくことは、皮衣よりも難しい。しかし、ここに掲げた三書は、細部に相違はあるものの、光源氏の須磨下向と関わりのある、御溝水に埋めた薫物だ、ということでは共通している。

『源氏露』で、「唐人の贈り物」の薫物に関連していると考えられる叙述を見出すことは難しい。ただ、唐人と薫物が関連する、興味深い叙述がある。

かほると名付奉るは、此御身の匂ひたゞ人にてもあらず。かくはしく包（ツツ）はせたまふ程に、おひそたち給ひてかほる大將とは申也。女三のくわいにんの時、源氏たき物あわせ給ふを、思ひながらこのみ給ふ故にかくのことしと云。又いはく、たき物を柏木右衛門のかみ、から人の方より砂金千両にとりかゆるを、女三の宮に奉ると云せつも有。源氏より彼たき物の大事を女三のみやにかたり給ふを、かほる大將におしへ奉り給ふときこゆ。

(柏木巻)

薫の身に生まれつき芳香が備わるとは、物語本文では、匂兵部卿

巻に描かれる。

香のかうばしきぞ、この世の匂ひならずあやしきまで、うちふるまひたまへるあたり、遠く隔たるほどの追風も、まことに百歩のほかも薫りぬべきこちしける。

薫の身になせ芳香が備わるかは、物語本文では明らかにされていないし、古注釈書でも詮索しない。しかし、それでは不満に思つたのであろうか、『源氏露』では唐人と結びつけるのである。

薫の身に芳香が備わるのは、女三の宮が薫を懐妊した時、光源氏が薫物合わせをしたからだとか、薫の実の父である柏木が、唐人から手に入れた薫物を、女三の宮に献上したからだとか、説明する。

また、光源氏が女三の宮に語つた「薫物の大事」を、女三の宮は薫に教えた、とも言う。恐らく、この「薫物の大事」とは、唐人が光源氏に教えたものなのだろう。

ちなみに、『新撰増注光源氏之小鏡（せうけん）』にも、懐妊時の女三の宮と薫物とを結びつけた秘説が見られる。

さて又、かほると申いはれは、御身おのつから牛頭（ごう）ぜんだんかうのごとくかうばしくて、この世のかはりならず。うちふるまいしおいかぜ、百歩（ひゃく）のほかまで匂ひけり。

（この世の匂ひならず、あやしきまで、うちふるまひたまへるあたり、遠く隔たるほどの追風も、まことに百歩のほかも薫りぬべきこちしける。）

(匂兵部卿巻)

蕉の身に芳香が備わる理由を、母女三の宮が懷妊時に、つわりがひどくて麝香しか食べられなかったからだ、とする。『源氏露』のものとは異なるが、相互に関連しているのではないか。

『源氏露』や『新撰増注光源氏之小鏡』の説は、異本小鏡などが伝える「唐人の贈り物」の蕉物とは異なる。しかし、これも唐人と光源氏との関わりから派生したものであることは確かであろう。もう少し蕉物に関する秘説が紹介されてくれば、御溝水に埋めた蕉物と、蕉が教わった「蕉物の大事」との関係なども明らかになってくると思われる。

(三)鏡・扇

「唐人の贈り物」である鏡と扇を、異本小鏡は次のように記す。

又鏡は、御身のうへにわつらひあるへき時は疊けるとかや。又扇は、御なやみの時つかわせたまへはおこたり給ふとかや。これなむつまこかす扇といへり。

(桐壺巻)

人の身の上に災いがある時に疊る鏡と、病気を治す「つまこかす扇」、これらが「唐人の贈り物」の鏡と扇だというのである。物語本文で関連するかと思われるのは、鏡が須磨巻の、

御髪かきたまふとて、鏡台に寄りたまへるに、面瘦せたまへる

影の、われながらいとあてにきよらなれば、「こよなうこそ、おとろへにけれ。この影のやうにや瘦せてはべる。あはれなるわざかな」とのたまへば、女君、涙を一目うけて見おこせたまへる、いと忍びがたし。

身はかくてさすらへぬとも君があたり

去らぬ鏡の影は離れじ

と聞こえたまへば、

別れても影だにとまるものならば

鏡を見てもなぐさめてまし

柱隠れに隠れて、涙をまぎらはしたまへるさま、なほこら見るなかにたぐひなかりけりと、おぼし知らるる人の御ありさまなり。

とある場面に出てくるものであろう。扇は夕顔巻の、

さすがにされたる遣戸口に、黄なる生絹の単袴、長く着なしたる童の、をかしげなる、出で来て、うち招く。白き扇の、いたうこがしたるを、「これに置きて参らせよ。枝もなさげなめる花を」とて、取らせたれば、門あけて惟光の朝臣出で来たるして、奉らず。

と、光源氏に差し出された扇が「つまこかす扇」にはふさわしいように思う。しかし、この扇は夕顔からもらったものであり、「唐人

の贈り物」とするには疑問が残る。

この鏡と扇に関する秘説は、蕉物よりもさらに少なく、断片的にしか知られていない。『源氏露』では、

さてこそめしかへされ給ふへきに定り給ふ。又紫の上よりもよろこひの御つかひに、つまこかしたる扇・形見のかゝみ・衣なと取そへ送り給ふ。

(蓬生巻)

と記す。帰京を許すことが決まった時に、「つまこかしたる扇・形見のかゝみ」や衣などが、紫の上から光源氏のもとに送られたというのだ。

京から須磨へ送られた扇と言えば、蕉物の項で掲げた『源氏物語一部之抜書并伊勢物語』に、

(前略) 御使はとうのちうしやうして、彼たき物にあふき一ほんそへて、すまへをくり給ふ。

(50)

とある。『源氏露』で言う「つまこかしたる扇」との関連が考えられる。扇は、京から須磨へ送られた物として、秘説の背景にある中世「源氏物語の世界」では描かれていたのではないだろうか。

なほ、『源氏露』蓬生巻で、紫の上から光源氏に送られた物として、衣が出てくる。この衣が、物語本文で、

旅の御宿直物など、調べてたてまつりたまふ。織の御直衣、指貫、さまかはりたるここちするもいみじきに、「去らぬ鏡」と

のたまひしおもかけの、げに身に添ひたまへるもかひなし。

(須磨巻)

と、紫の上が、須磨にいる光源氏のために送ろう、と準備した物の中にあるかどりの直衣であるとすれば、「唐人の贈り物」の一つとみなされていた可能性もある。

一 四塚のはかせに、七御年、源氏あひたまひしとき、彼はかせのかたより、くれなひのきぬ・ちんにてひきたるくしを、まうけの君にまいらせし也。これを、須磨のかどりのきぬ・同かどりのくしといふ。

(『源氏物語一部之抜書并伊勢物語』6)

「四塚のはかせ」は、光源氏を覬相した高麗の相人を指し、本稿でいうところの「唐人」のことである。その「四塚のはかせ」が光源氏に、紅の衣と沈を引いた櫛を献上した。これを、須磨のかどりの衣・かどりの櫛と称する。『源氏物語一部之抜書并伊勢物語』では、衣や櫛を「唐人の贈り物」としているのだ。また、『光源氏一部歌』では、

かどりのしやうそくの色は、水色のすゝしなりとあり。六位の人着すると云。位たかき人も、たびにはめさるゝ也。いこくよりわたりはしめたるしやうそくと云。なにさまよき事にはもちいぬ物とみゆ。

(須磨巻)

と記し、かどりの装束が異国から伝わったものだ、と言う。異国から渡来したかどりの衣は、昔、光源氏に献上されていたのだらう。身分の高い人は旅で着るから、帰京が決まった光源氏のもとに紫の上から送られた物の中に含まれていたのだ、とも言う。

鏡と扇は、「唐人の贈り物」として提示されていたが、その不思議な効力や背景にある世界は、わずかに述べられるだけである。現在知られていないだけかもしれないが、皮衣や薫物に比べて、相互に関連するような秘説がほとんど見当たらず、輪郭が見えてこない。中世「源氏物語の世界」では、影の薄い存在だったようである。

最後に

「唐人の贈り物」として、皮衣・薫物・鏡・扇の背景にある世界を見てきた。それぞれが派生した元だと考えられる『源氏物語』の本文を指摘することはできるが、描かれる世界は、物語本文の側から見ると、荒唐無稽としか言いようのないものであった。しかし、それぞれの秘説が、勝手に創作されたものではなく、中世の連歌師たちによって、語られ伝えられてきた解釈のものであることは、各秘説が相互に関連していることからわかる。

中世「源氏物語の世界」は、全体から切り取られ、意味不明に思

える秘説の断片からしか垣間見えないだけに、明らかにしていくことは難しい。しかし、関連すると思われる秘説を拾い集めていくことによって、少しずつ解き明かしていくことができると考えている。本稿は、その試みの一端である。

注

- 一 『源氏露』は、片桐洋一編『王朝文学の本質と変容』（平成十三年九月発行予定 和泉書院）に翻刻する予定である。
- 二 『源氏物語』の引用は、新潮日本古典集成による。
- 三 『弄花抄』の引用は、『源氏物語古注集成』（桜楓社）による。番号は、項目番号を示す。
- 四 異本小鏡の引用は、片桐洋一編『異本源氏こかゞみ』（昭和五十三年 和泉書院）により、私に句読点を付した。
- 五 伊井春樹『源氏物語一部之抜書并伊勢物語』解題および翻刻（紫式部学会編『源氏物語の思想と表現 研究と資料——古代文学論叢第十一輯——』平成元年 武蔵野書院）により、私に句読点を付した。番号は、翻刻に付された通し番号を示す。
- 六 「水原」の引用は、今井源衛・古野優子編著『山頂湖面抄諸本集成』（平成十一年 笠間書院）による。

- 七 稻賀敏二「創作的注釈が描く源氏物語像——『塵荆抄』、蓬左本抜書の共通源泉——」(『源氏物語の研究』物語源流 檜樹論) 平成五年 笠間書院、前掲注五書。
- 八 『塵荆抄』の引用は、『塵荆抄 上』(昭和五十九年 古典文庫 第四四八冊)による。
- 九 田尻紀子編著『新撰増注光源氏之小鏡——影印・翻刻・研究——』(平成七年 おうふう)により、私に句読点を付した。
- 十 『光源氏一部歌』の引用は、『源氏物語古注集成』(桜楓社)による。

(なかば よしこ／本学非常勤講師)